



争力を殺ぐ結果となることが数量的に示された。

第5章では別の角度からインドネシアのパーム油製品の輸出競争力が考察されている。すなわち、アジア、アフリカ、欧州の各地域におけるインドネシアのパーム油製品（パーム原油および精製パーム油）の輸出量の変化を、各地域から主要な輸出相手国をとりあげてマレーシアとの比較で検討している。用いられた手法は輸出量の変化を市場の拡大と競争力（市場シェア）の変化に分解するCMS A分析である。その結果、1999-2001年から2005-2007年にかけて多くの地域・国でインドネシアの輸出が増加したが、その要因は競争力の強化によるものであることが解明された。

第6章ではさらに、中国、インド、オランダ市場に着目し、これらの市場におけるパーム油の輸入需要構造をAIDSと呼ばれる需要体系モデルを用いて推定し、その推定結果を通じ、インドネシアのパーム油の需要面からの競争力を検証している。主要な結果のひとつは、インドネシアのパーム油に対する需要の価格弾力性が中国とインドにおいてマレーシアより大きいことが示されたことであり、これはコストダウンにより輸出価格を低下させることができれば、これらの市場でさらに成長が見込まれることを意味する。

第7章ではこれらの分析を通じて得られた結論と、インドネシアのパーム油産業のさらなる発展のための政策提言がなされている。政策提言は国内対策と対外政策に分けられ、国内対策では付加価値の高いパーム油精製部門への投資の拡大、農民が農場の現場においてパーム油産業に関わる機会の増大などの提言がなされている。また、対外政策では、輸出競争力向上のために輸出促進活動を推進すること、政府と民間業者の連携を強化すること、価格安定や投資においてマレーシアとの協調を図ること、などが提案されている。

以上のように、本研究はインドネシア経済におけるパーム油産業の役割を国内経済および輸出市場の両面にわたり包括的に分析し、数量的にパーム油産業の重要性を明らかにしており、優れた研究である。特に世界のパーム油市場でライバル輸出国であるマレーシアとの競争力比較の分析は、他の商品の輸出市場分析にも応用できる手法を提供している。また、パーム油産業という特定の一次産業がインドネシア経済全体に果たす役割の大きさを具体的に示したことは、経済発展における一次産業の重要性を再認識させ、政策的にも重点化を図るべきとの提言に説得力を持たせている。さらには、今後の経済発展にむけてどのような輸出戦略が望ましいのかを政策的に検討している。このように本研究は学術上かつ応用上の価値が高く、よって審査委員一同は本論文が博士（農学）の学位を授与するにふさわしいと判断した。